昭和46年度 第24回 文化祭 今日、開催される

高校阿倍野新聞

発行所
大阪市阿倍野区阪南町中一丁目30番34号
大阪府立阿倍野高校
新聞部
編集責任者　北野孝治

紙面紹介

一面　文化祭　補助予算
二、三面　体育大会　水泳大会　アメリカ留学記
四、五面　特集「大阪大空襲」　校長対談
六面　運動クラブ合宿　一年林間学舎

基本方針出される
クラブを優先的に

☆第二十四回文化祭が、今日行なわれる。各文化クラブは、この日のために☆
☆毎日午後六時ごろまで残って準備してきた。今年は、文化祭を生徒の手で☆
☆するという事で、昨年より一層忙しかった。また、文化祭の基本方針がは☆
☆っきりと決められ、文化クラブ全体が協力して行なうことになった。是非☆
☆みんなでよい文化祭にしよう。☆

今日、文化祭が開かれる。各クラブとも今日のために連日六時の最終下校時刻まで頑張っていた。時計を見る暇もなく、先生が下校するように呼びに来られるまで活動していたクラブもあった。今回は、執行部から文化部基本方針が出された。その内容を上げてみると、第一に文化クラブで展示、出演する者は文化祭一般参加はできないということ、第二に参加するクラブは各々、独自の力で行なうということである。文化クラブの発展を願って出された訳である。それで、各クラブはそれぞれ趣向をこらしているようで、その努力の跡が見られるだろうと思う。しかし、この基本方針の発表が少し遅かったので、影響されたクラブもあった。あるクラブでは先に、発表内容を決定していて、基本方針に沿わずに苦労していた。

今年の文化祭の特徴としては、昨年までは、生徒が文化祭を行なうといっても、ほとんどの運営は先生方が中心になって行なわれていた。しかし、今年からは、生徒中心の文化祭にして、運営など一切を執行部が行なう事になった。こうした自治活動が文化祭の意義を増し、非常に文化祭を盛り立てると思う。

現在に至るまで文化クラブは、展示や舞台中心にやってきた。いつまでもこういった一定の形式を保っているのはよいことだとは言えないのではないだろうか。一昨年から一般参加も許可され、文化祭というものが、しだいに移り変わっていくことを考えてほしい。

文化祭に、過去一年間の汁の結晶が展示され、発表されるといっても過言ではない。生徒は、自分達の文化祭として有意義に過ごして頂きたいと思う。しかし、ただ見たり聞いたりして、興味本位に過ごすだけでなく、その中から何かを学びとってほしいと思う。各クラブとも一生懸命活動してきたのだから、よく活動の成果を見い出してほしいと思う。体育大会も無事終わったし、文化クラブも充実したクラブ活動をして頑張ってきた。次第に盛り上がってきた文化祭が、阿倍高生全員でこの一年間築き上げてきた文化祭が、大成功を納め、無事終了する事を期待するだけである。

×　×　×

各クラブ、一般参加の内容は次の通りである。

▽クラブ△

・クラブ名&テーマ

※ステージ（講堂）

琴
演奏「光と風」「さざなみ」等

演劇
「ロミオとジュリエット」

放送
放送劇
「一台のエレベータ」

軽音フォーク
演奏　恋の汽車ポッポ、血まみれの鳩、etc

軽音エレキ
演奏　ARE YOU READY, HEASTBRAER, TWIST & SHOUT TELL ME, etc

洋舞
テーマ「愛」

音楽
合唱組曲「旅」

ESS
英語劇
「イーノック＝アーデン」

ブラスバンド
外国曲特集　8曲
いそしぎ、狩のポルカ、乾杯の時、etc

※展示

・〔 〕は場所

美術　〔一—一・一—二〕
二十一世紀のメルヘン

軽音フォーク　〔一—四〕
フーテナニー

宗研　〔一—七〕
テーマ「死」

地理研　〔二—三〕
出雲地方の伝統的産業

社研　〔二—四〕
教科書の変遷と教育

映研　〔二—五〕
名場面集

歴研　〔二—六〕
現在と過去との調和

写真　〔二—七・二—八〕
水の静と動

点字　〔三—二〕
盲人の生活

華道　〔三—三〕
美の追求

図書　〔三—四〕
テーマ「旅」

新聞　〔三—五〕
若い街

煎茶　〔三—六〕
煎茶の真髄

茶道　〔作法室〕
長板総飾薄茶点前

書道　〔書道室〕
書道美について

生物　〔生物室〕
岩湧山の生物調査

▽一般参加△

野外舞台コーナー
一—三

S・Fコーナー
三—四・三—六

ゲームコーナー
二—三

チャリティーバザーコーナー
一—二・一—六・一—七・二—七

飲食コーナー

喫茶店
一—四・一—五・一—八・二—四・二—八・三—一・三—七

食物店
一—五・二—六・三—二・三—五

補助予算
大幅減額

本年度も、文化祭が開かれるため、各文化クラブと自治会執行部との間で、文化祭補助予算の要請と折衝とが行なわれた。

その結果、今年は、要請金額十九万千三百五十円に対し、決定金額は六万四千五百六十円であった。またクラブ別では、洋舞・宗研・点字・放送・演劇・生物・エレキ図書・美術などのクラブが、五千円から二万円の減額であった。

ところで、毎年同じように予算の大幅な減額がおこなわれている。いろいろと原因はあると思う。一つに、今年度、昨年度に比べ自治会全体の予算が縮少されたことである。これは何といっても、金がないのだからいたしかたないことかもしれない。しかし、あまりにも自治会員の表情を見ていると、どうも自治会予算というものがまるである特定の人間があつかっているかのように、全然無関心である。なぜ、このように要請額と決定額とがくい違いができてくるのかということについても、いろいろと考え、なによりもまず自治会というものに対して関心をもってもらいたいのである。

なお、本年度の全生徒からの臨時徴集費は、昨年度と同じく一人当たり二百円であった。

各クラブの文化祭補助予算の要請額、及び決定額は、左表の通りである。

◇　◇　◇

クラブ名	要請額	決定額
映研	2,650	2,650
煎茶	4,450	3,750
洋舞	11,740	3,000
宗研	15,020	4,000
新聞	4,600	2,310
点字	6,670	1,820
ブラスバンド	8,530	4,000
地理研	3,700	2,570
E・S・S	4,000	3,000
歴史研	3,920	2,920
書道	6,600	2,580
放送	25,330	5,900
演劇	10,000	3,800
社研	5,450	2,000
生物	8,950	2,160
音楽	3,600	1,500
軽音	20,600	3,000
写真	2,700	2,000
図書	26,350	3,100
華道	10,350	2,500
茶道	4,750	2,000
美術	12,740	3,000
計	191,350	63,060

部説

事務的な執行部

自治会というものをみんなはどのように考えているのだろうか。現在では、自治会役員選挙には立候補者がなかなか集まらない。それも、選挙管理委員からの強い説得でやっと出るというあり様だ。これでは、本来の自治会の姿とは言えないのではないだろうか。ただ、人数がそろえばいいという問題ではないからである。このような状態でも活動は始められる。選ばれた役員は、もちろん、一生懸命にやっている。しかし、外側で見ていると自治会執行部の活動は事務的なことしか目につかない事実、事務的なことも重要であるまた、それに追われることもあるだろう。しかし、事務的なことをするだけでよいのだという考えでは困る。生徒間で問題になっていることを自治会全体の問題として取り上げ、実際にそれについての討論をするなり積極的にその問題に取り組まなければならないのだ。現在の状態では、はっきり言って自治会執行部は事務的なことしかやっていないと言えるのではないだろうか。これに反論できる人は、果たして何人いるだろうか。（別に執行部だけを責めているのではないが…）このような自治会だから、みんなは自治会執行部に協力しない面も出てくるのではないだろうか。みんなは、このような事務的なことだけをする執行部を望んでいるのではないのだ。生徒間の問題に真剣に取り組む執行部を望んでいるのだ。

今までに、自治会執行部は何をしてきたと言えるだろうか。みんなの脳裏に、自治会の残した業績というものが刻み込まれているだろうか。自治会というものは、会員の悩みを解決し、楽しい学校生活を送れるように努力することだということを忘れているのではないか。是非、基本的なことを大事にしてほしいのだ。執行部が事務的なことがあって、どうしても他の仕事ができないというのであれば、それら事務的なことを処理する機関を作って、その監督を執行部がするというふうなことも考えねばならないと言えるだろう。

そうした時に、初めて会員は自治会というものを再認識し、積極的に執行部に参加又は協力しようという動きが出てくると思うのである。そして、みんなが充実した学校生活を送れると思うのである。とかく、執行部と会員との間が疎遠になりがちである。職員室に行くのがいやだという人もいるように、自治会室もそうなっていくということも注意すべきだと思う。会員との交流は非常にたいせつだと思うのである。

実際にこれだけのことをするのは、時間もかかりたいへんかも知れないが、そこを頑張ってやっていかねば阿倍高生並びに阿倍高の発展というものは見られないと思うのである。もし、事務的な仕事だけしかしない自治会執行部が続くのであれば、執行部が必要と感じなくなるのではないだろうか。そうした結果執行部がなくなる可能性もなきにしもあらずということになりかねない。

ここに書いたことを現実のものとしてとらえ、真剣に考えなければいけないのだ。〝みんなの自治会〟となるように。

針の穴

二学期に入って、「さあ、スポーツの秋だ」なんてがんばろうと思ったのに、たびたび光化学スモッグ注意予報が出て、針子ショックだなぁ。そのうち「わーれら耳を洗いて」が「わーれら目を洗いて」になるかも…。▼ところで、三年振りに水泳大会がありましたね。針子なんか張り切って、前日まで、一日つぶしてやるのかなと思っていたのに。でも、そう思っていたのは、針子だけじゃないんですよ。▼水泳大会の後に、実力テストがあったけど、その名の通り、「実力」がズバッとわかった感じ。夏休み中に教科書と、御無沙汰していたのが、悪かったかな。教科書が、すっかり日焼けしてたものね。▼休み明けのテスト中に火事が起こった学校があったけど燃える校舎に関係なく、テストを続けたというから驚いたなあ。その事について、いろいろ意見があるけど、職員室前の黒板に「自」を見つけて手をたたいて喜ぶ阿倍高生とは大違い。▼でも、まさか三年生は、そんな状態ではないでしょうねえ。▼ところで、先ほどの火事の話、出火の原因がタバコの火というから、針子ますます驚いたなあ。▼そういえば、阿倍高にもタバコを吸う生徒が、目立ってるんですってね。先生から聞くところによると、タバコって、二度、三度と吸ううちに、やめられなくなるんですって。それに大人になってからでは、なかなかやめにくいという事です。▼ところで文化祭が終わるとすぐ、二年生は修学旅行ですね。いわゆる観光旅行的、見物旅行的なものには、くれぐれもならないように。一年生も早くも修学旅行について、動き出しているそうです。一年生の皆さん、「先んずれば人を制す」です。修学旅行直前になって、あせらないように…ね。▼ところで今日から文化祭なんだけど、放課後活動できるといっても、時間が足りないのか、朝早くから来て活動しているクラブがありましたね。熱心な事です。▼この頃は、日が短くなったから、朝起きた時はまだ暗く、帰る時はもう暗く、なんていう毎日の人もいたかも。そういう事を頭に置いて、文化クラブの発表を見てくれたらなあ。

第二十四回 体育大会

生徒の手で作った

☆26日に突然の台風にみまわれ延期となった体育大会は、9月28日晴れわたった秋空のもとで開催された。夜遅くまでかかって仕上げられたデコレーション。練習に練習が重ねられた応援。そして創意工夫がこらされた競技や、成果がみのった応援合戦etc。生徒自らの手によってこれらは行なわれた。そのことを一大契機として今後に〝何か〟を残すことを期待したい。☆

Dグループ逆転優勝
なごやかなムードで終る

今年は、基本的に昨年までとは違い、生徒自身の手で作られた。しかし、形は昨年と同じであったA・B・C・Dの各グループに分けられ、グループ対抗の競技が行なわれた。その結果、最後の競技であるグループ対抗リレーでDグループが逆転優勝をとげた。

雨で延期され、平日の体育大会となったので観客は少なかった。そのためか、全体的に盛り上がりが少なかった。全般的に和気あいあいとしたムードで、ピリッと引きしまったところがなかった。

初めての試みである、生徒の手で体育大会を作るということについては、生徒の自主性や主体性が重んじられてきたという点では、評判がよかった。しかし、初めてということもあって、まだまだ充分でないという見方も多かった。又、各係を運動部員に任せたりしたものの、まだ生徒の中央部だけが動いているという感じだった。生徒一人一人にまで目的・意義・やる気などが浸透していなかったようだ。

また執行部の連絡が不充分だったため、一般生徒から不満が起った。たとえば、二年男子の団体演技の組み立て運動のプログラム変更、三年生の仮装行例の準備時間、三年女子の玉入れの説明の不充分さなどである。

一方、競技は、昨年と同様走る競技が多かった。男子の団体競技がアンケートの結果、全学年〝棒倒し〟だった。見ていると恐怖感を誘うような激しい競技だった。女子は、アンケートの結果〝玉入れ〟だった。女子の団体競技にはもう一つ、アイデアがほしかったしらけた感じのした競技だった。しらけたと言えば、今年作られた〝お待ちどうさま〟もそんな感じだった。パン食い競争とアベックの二人三脚を組み合わせた競技だが男子が早くパンを食べ、女子が食べ終えるのを長く待ってるという状態だった。スピード感に欠けたまったく〝お待ちどうさま〟という名にふさわしかった。もう一つの新しい競技である〝女性上位〟は評判が良かった。これは今までにあった〝今は昔〟と〝ボートレース〟を組み合わせた競技である阿倍高にはうってつけの名の競技では(?)

みんなに深く期待され、女生徒と担任の先生で行なわれた着付け競争は、今年も大評判だった。今年の着付けの内容は、非常にテレビの影響が強く出ていた。特に高橋先生のムチドリ、伊藤先生の月光仮面、安永先生のイジワルばあさん、藤村先生の校長先生欧州訪問姿、小西先生のみなしごハッチなどがよくうけた。藤村先生が校長先生と腕を取り合って歩くというハプニングもあった。雰囲気に乗っていた先生も行事が終ると、あわてて化粧をおとしている姿もこっけいだった。

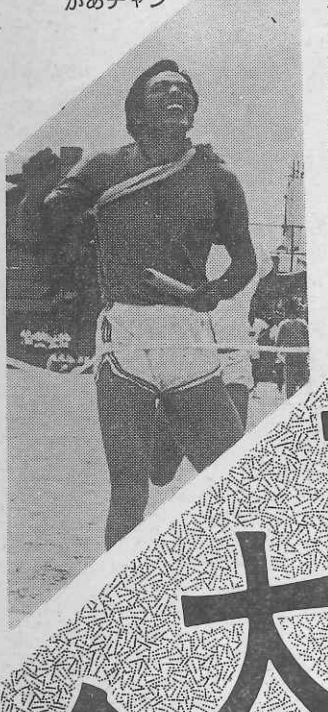
予定より時間が超過したため、昨年と同様、職員リレーがとりやめとなった。しかしそれでも閉会式が終了したのが四時半頃で、後のコーラスファイヤーに影響した。

今年の体育大会は、全体的に活気がなかった。それがダンスや柔道体操にみられた。今年の試みを踏み台にして来年は、もっとすばらしいものが生徒の手で作れるようにしていきたいものである。

得点結果

グループ名	得点
A	292
B	258
C	277
D	293

やったぜ！かあチャン



工夫を凝らした仮装行列

体育祭も終わりに近づいた頃、毎年一番観客の興味をひくと思われている三年生の仮装行列が行なわれた。今年も自治会から仮装行列費としては出ず、各人から百円ずつ集め、出場人数は二十人以内ということで行なわれた。

今年は、一般に衣装が派手で、道具もあまり例年に見られないリヤカーや棺のような大きなものが出て少しごたごたしていたようだった。

又、例年のように男生徒の女装が多く、きれいに仮装した人もいたが、気味悪い人の方が多かったようだ。一般の声としても「気持悪い！」が連発。しかし、やっている方にとっては、暑いのに何枚もの着物を着たり、ドーランをベタベタぬられて大変なのだそうだ

今年は、昨年のように〝〇〇賞〟というものはつけられず、〝優勝と〟いう形で三年八組の「世界の神様」が表彰された。

この〝優勝〟というのは、執行部が、観客の雰囲気や拍手などで決めたそうである。

各組の内容は次の通りである。

一組　白雪姫

童話の白雪姫と七人の小人が出た。白雪姫は女子がやっていたので、見やすかったようだ。

二組　個性再現

クレオパトラや白雪姫、囚人や怪盗ルパン、やくざ、魔女などが出ていた。出ているのが、色々、ばらばらで統一性がないように感じた。

三組　世界の結婚式

世界といっても日本の古代のものもあれば、死人の結婚式もあるというようで、男子が女装、女子が男装をしていた。やはり、気持ちが悪いのが多かったようだ。

四組　ここは天国釜ケ崎

極道や警官、奇妙なお色気をふりまく女性（？）などが出ていた。かなり破廉恥な感じもしたが、小道具が、良かったようだ。

五組　ゆりかごから墓場まで

この組は、男子ばかりが出場し、人間の一生を表わしていた。女子は主にプラカード持ちだった。そのプラカードが良い効果をあげているように思った。

六組　西部開拓史

リヤカーで作ったほろ馬車に乗った美人（？）、弓を持ったアメリカインディアンなどがいて、中にはシャツとステテコ姿の開拓者もいた。

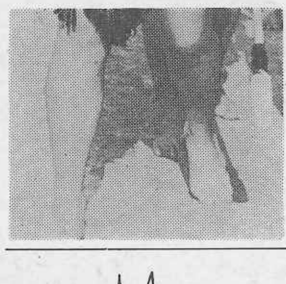
七組　われわれの異性

この組は、男子が女装、女子が男装していた。バトンガール・女学生・バニーガール・アラビアンナイトの女性などだった。

八組　世界の神様

土人まがいの黒く化粧した神様やどんどん太鼓をたたく雷の神様や、大きな十字架をせおっているキリストなど、多種多様な神様がいて、とても楽しかった。

胴しよう？



復活した水泳大会

〝生徒だけの手による〟――この一大目的をもって、去る九月二日・三日の両日にわたり一・二年生による水泳大会の火ぶたが切られた。夏休みがあけてまだ間もなく、それだけにだれ気味になるとおもわれたこの水泳大会であったのだが、去年行なわれなかったこともさいわいしてかなりの盛り上がりがあった。しかし、やや残念だったのは、三年生が不参加であったことである。大部分の者が競技に参加して、又競技に参加しないものもかなり熱烈に応援していた。

この大会は先述のように〝生徒自らの手〟で行なったものであり、アドバイスの先生もわずか二人だけであった。今まで行事といえば余りにも先生方の手に頼り過ぎたきらいがあったと思う。だからこの大会は大変な成長だ。そして、それに加えて競技種目の内容もかなり創意工夫がこらしてあった。

例えば『走り競争』や『二人三脚』――これらは水泳の余り得意でないものでも参加できるしユーモアを誘う所もあり、かなり成功していた。それから、『犬かき競争』も奇想天外なもので好評を得ていた。そして今年特に目だったのは、従来のように運営を委員にまかせないで〝水泳部〟という一つのクラブがそれに参加協力したということである。このことは競技の進行に大きくプラスの作用をしたようだ。最後に残念だったのは運動委員会が、この大会をやるだけやってそのままにしておいたことである。やはり最後のしめくくりが大事であろう。そしてこれを転期として、これからもこの生徒自身の手によるという態度を失わないで欲しい。

男？　女？

五面よりつづく

る。

また、政治関係では、国際情勢を知る、国境をなくす、国と国との差をなくす、世界中の友好関係を深めるという国際的な考えに対して、自衛隊をなくす、憲法維持政治を変える、良い政治家を選ぶ民主主義の矛盾の追求などという現在のわが国の政治状態に、不満を持っている姿が想像できる。

反面、今の自分を維持する、人間らしい心を保っていく、戦争を知る、戦争反対の意志を強固にするという消極的ではあるが、戦争反対を願うという気持ちが表われている。

変わった意見としては、外国語をマスターして、外国人に誤解されないようにするという、それでいて一見コミカルなようであり、もっともな意見があった。

このアンケートから、一番考えさせられたのは、「何もやる気がない」「そんなことは無理だ」という意見があったことだ。やはりこれからの自分たちに関係あることなので、もっと真剣に考えてもらいたいものだ。

問8　空襲の実態についてはっきりと知りたいと思いますか？

YES　1年　69・0％
　　　2年　73・0％
　　　3年　60・0％

理由については、グラフを見てもらってわかるように、「戦争の一部だから」と答えた人が一番多く、これは一年、二年、三年ともに共通している。その他としては「はっきりと知らないから」「恐ろしさも把握しないといけないから」「戦争を知ることなしに反戦を語れないから」という意見が目立った。

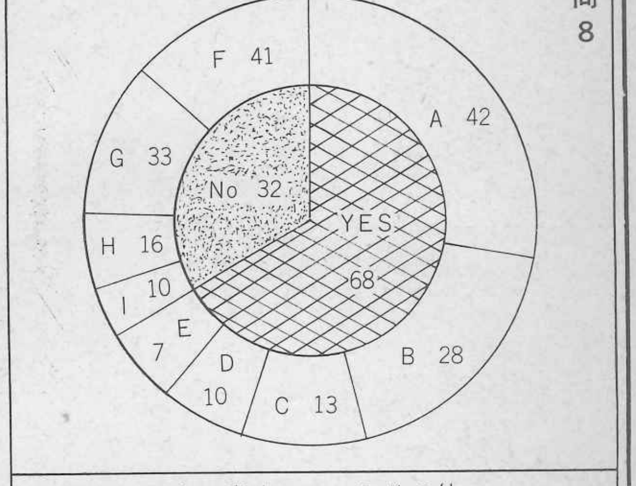
NO　1年　31・0％
　　2年　27・0％
　　3年　40・0％

「NO」と答えた人は、こちらからあげた例よりも、やはり、自分自身の考えをという気持ちの人が多く、その他の欄が一番多かった。中でも、「悲惨すぎて知る気がしない」「過去のことより将来末来に重点をおきたい」というのが多かった。また、グラフから見てもらってもわかるように、「現在の自分には無関係」と答えた人が16％もいたのは驚いた。

問9　僅か26年前の父母、祖父母街などの悲惨な歴史を知ることとは、あなたの心にどんなことを連想させると思いますか？

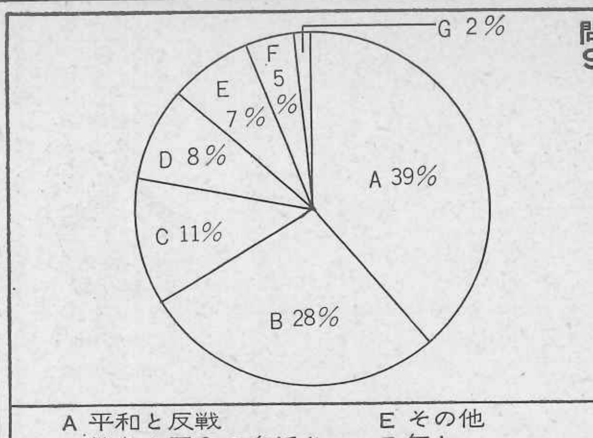
阿倍校全体の統計としては、グラフを見てもらったらよくわかるように、「平和と反戦」が一番多かった。しかし、学年別に見ると順序は同じでも、割合に変動がある。特に目立ったのは、「平和と反戦」と「社会歴史の厳しさ」で前者は一年44％、二年36％、三年37％で一年が多い。後者においては一年9％、二年16％、三年9％で二年が多い。また多くはないが「無し」と答えた人が5％いるのは、どういう考えからだろうか。

問8



A 反戦、平和の意志を強固にするから
B 今まで知らなかったから
C 戦争の一部だから
D 非戦闘員の被害だから
E その他
F その他
G 現在の自分に無関係だから
H 現在、未来に役立たないから
I 今後、戦争は起こらないから

問9



A 平和と反戦
B 戦争と平和の身近さ
C 社会歴史の厳しさ
D 歴史への謙虚さ
E その他
F 無し
G 地方自治の民主化

☆追体験を出発点に☆

最後に、一庶民である森田寿一さんの意見を紹介しよう。

「今の世の中に差別があると言われますが、戦災体験にも差別がありますね。兵士の戦災や開拓史の記録は残っていて、恩給や補償も与えられるが、内地の非戦闘員の記録や補償はありません。非戦闘員の戦争体験のすごさは記録の中で埋没してしまっている。なぜならば、非戦闘員のうけた災害は新聞に載せるなという国の官尊民卑の考え方や、庶民の中で差別されている、自分たちは被支配者だという意識が薄いからです。しかし、近年になり、大衆が戦争の一部である戦災に何らかのことをせねばという民主主義の意識が出てきて、各地で市民運動もおこってきている。これは良い傾向です。戦争を防ぐということは、身にしみて感じた人の体験記を出発点にして、戦争はかっこいいものではない、悲惨だという気持ちを初めにもってもらいたいですね。体験記から身につまされて実感をもつこと──追体験は大切だと思います。そして戦争がおこるなら、徴兵拒否をするべきだと思いますし、人を殺すことを拒否することは、イデオロギーだけでなく、その人の人格だと思います。

戦争がおこってからではなく、おこる前に始めないようにどうしようかが大切ですよ。その手段として反戦運動などもありますが、庶民自身が団結することは困難ですが、庶民の運動は強いものになりますよ。

若者たちに、戦争はいやだということを意識だけでなく、身につまされて実感をうけてもらいたいです。」

〝最後に〟

現在、我々は平和な「昭和元禄時代」の真只中で、生活しているしかし、あまりに静かすぎて、あまりに平和すぎて、「戦争が起こるのでは……」という不安にかられたことはないだろうか。

我々は小さい頃、特に男子ならば、戦争をカッコイーなぁーと思ったことがあるだろう。確かに戦争というのは、戦車・艦船・ミサイルなどのメカニックへのあこがれ、及び人間の加虐性・優越感・擬似愛国心を、満足させるようなカッコよさを持っている。現にテレビや映画の戦争を、取り扱った作品の大部分は、そういうカッコよさを強調している。

現在は、戦争の本当の姿を伝えようとしている戦争体験者と、戦争のカッコイイ面ばかりに眼をむけがちな、我々非体験者の世代があり、両者の間に大きな〝みぞ〟ができつつある。あと四十年もたてば戦争体験者は、ほとんどいなくなってしまうだろう。そして、その時代を背負っている中核は、我々の世代なのだ。もし今、戦争体験者からじかに、〝戦争の本当の姿〟いわゆる〝戦争の非人間性〟を学びそこなえば、あとには死んだ活字の山ばかりが残ることになる。もうその時には、戦争を止める力は皆無である。そうしないために体験者は、戦争の悲惨さを語りつぐことが、又非体験者は、それにじっと耳を傾けることが、義務なのである。

もう一つ、一般に我々は戦争、特に一般人の被害というと、広島・沖縄などを考えるが戦争の惨禍を広島・沖縄にだけ、地理的に遠く想像するよりは、大阪で生活している我々にとっては、日常身近に親しく感ぜられるこの大阪の地で、自分達の僅か一世代前の父母祖父母が、いかに生き、いかに死んだか、ビルの林立する目前の街角がどのように死臭と灰に充ちていたかを、知ることのほうが、歴史と平和及び民主主義・地方自治を考える場合、確かに効果的であると思う。我々が身近な町に人間の創造の場として、愛着と責任をもって対処しようとする時、町の歴史と、そこでの人間の歴史的生死のあり方は、いとしく新しいものになる筈である。

そういう意味で、今度の特集は最も身近な戦争体験である「大阪大空襲」の告発と、阿倍高生へのアンケートを二本の柱とした。

校長先生の教育視察
フランスの教育機関　アカデミー

我校の根津校長先生は、五月下旬より一カ月の間ギリシア・フランスを中心に、世界各国の教育事情などを視察してこられた。

そこで我々新聞部員は九月上旬校長先生を訪ねて、各国の教育事情を中心に印象などをスライドをまじえながら、いろいろと聞かせていただいた。

【日程】

五月三十日
　東京羽田出発
三十一日～六月二日
　テヘラン市内視察
六月二日～六日
　アテネ学校視察
六日～八日
　ローマ市内視察
八日
　ローマ→パリ→ディジョン
八日～十二日
　ディジョン学校視察
十二日～十五日
　パリ市内視察
十五日～十八日
　ルアン学校視察
十八日
　ルアン→パリ→ベルリン
十八日～二十日
　ベルリン市内視察
二十日
　ベルリン→フランクフルト
　→ロンドン
二十日～二十二日
　ロンドン市内視察
二十二日～二十四日
　ニューヨーク市内視察
二十四日～二十五日
　サンフランシスコ市内視察
二十五日～二十七日
　ホノルル市内視察
二十八日
　東京羽田到着

ギリシャ

この国には、公立も私立の学校もあるということだが、私立のほうが非常に質が良いということだ日本大使館が世話をしてくれたのもすべて私立の学校であった。幼稚園から高校まで併設のある学校では、生徒一人一人が非常に上品であり、その学校の校長先生が教育について熱心で、日本の学校と文通を希望されたので、根津校長は約束をしてこられた。また、商船学校では学校自体が船になっているということだ。日本の学校と特に異なるところは玄関で、ここは日本のオフィスの玄関の様な感じのところだ。生徒数は男子ばかりが五百人程で、狭い教室に三十四－五人の生徒が学んでいた。学習している内容は根津校長らが学ばれた古い内容であったとのことだ。そこには、この学校と同じ様な学校が五校あり、その五校を一人の校長先生が担当しているそうだ。工業高校では、校内の機械のサンプルはすべて日本製で、先生方が乗ってこられる車も日本製だそうで、その校長先生は日本に対しては非常に尊敬の気持ちを持っておられたとのことであった。各校とも女子はすべてきれいな制服があり、運動場は狭く体育の授業は特にせずアテネの社会体育の施設を使用するそうだ。

フランス

フランスではディジョンとルアンを中心に教育事情を視察されたそうだ。まず、フランスでは学校とは学問だけをするところということで日本とは違い生活指導・クラブ活動・道徳教育などはせず、これらは家庭での社会体育の分野であるとなっている。クラブ活動はあるが不活発でほんとうの趣味で行なっていて、選手になる者は社会体育の場でやっているそうだまた、二十三のアカデミーというものがおかれ、一つのアカデミーが二～三の県の教育の責任を受け持ち所長や指導主事ら四、五百人の人々が地下一階地上六階の素晴しい建物で働いているそうだ。地下には印刷機械が置いてあり色々なものを印刷していて、一階から六階にはスライド・フイルム・地図などの教材やテレビ・ラジオ・ステレオなどの視聴覚関係の機材がそろえてある。そして、学校が使用したい時にはアカデミーに行って借りることができるようになっており、いろいろな本などもあり図書館は生徒も利用できるようになっている。ここで世界的に問題になっていることは観察課程がおかれていて、日本の小六中一・二・三高一に相当する五年間にわたり生徒一人一人の資料がつくられ、校長・担任・医師・教育学者・心理学者・父兄代表・時には生徒代表二名により構成された指導委員会で生徒の進路が定められ、もし不満があればかなり難しいテストに合格しないと進路を変えられない。それで、たいがいの場合は委員会の指示通りになってしまうということだ。我々がこれを知らされたときには「殺生だ」と思うであろうが、委員会の人々は大変自信を持ってこの制度に取り組んでいるとのことである。このようにしてきても最終的には大学入試はバカロレアという試験を受けないといけない。これは六月と九月にあり六月に失敗したら九月にやりなおしをするが、九月に失敗したらもうこれで終わりとなる。それで浪人は一人もいない。つまり試験を二度とも失敗すると社会人になるのである。先生は生徒一人一人を教え、先生も非常に熱心である。

イギリス

イギリスはあまり視察をすることができなかったそうだが、我校の卒業生で子供をイギリスの学校に入れられた方によると、イギリスの学校の授業は日本と比へるとイギリスのほうが相当程度が高いそうだ。

ヨーロッパではほとんどの学校が日曜日の他もう一日の休日をとっている。だいたいが木曜日を休みにしているが、木曜日と土曜日を午前中授業としている学校もある。木曜日が休みであれば土曜日は午後からも授業はある。昼休みは二時間あり、先生や家の近い生徒は家に帰ってゆっくり昼食をとりまた学校に来る。しかし、家の遠い生徒は学校で日本とは比較にならないほど素晴しい給食を食べる。生徒たちは他人には親切にしないといけないということが実に正しく身についていたそうだ。

根津校長は世界一周をしたことによって、日本に対し外から考えることができたそうだ。日本は第二次世界大戦という大きな戦争に負けたにもかかわらず、戦後の短期間で大国に劣らないまでに成長した様子をまのあたりに見て、外国人は、初めのうちは日本に対し尊敬の念を持っているのが、あまりにも日本の成長が素晴しいためにかえって、『恨み』や『ねたみ』がおこるのではないのかと思われたそうだ。

海外の先進諸国では学生は大変熱心に勉強をしているそうである。今日、日本がここまで成長したのは過去の人々が一生懸命努力してきたからであり、我々もなお努力を継続しなければならない。素晴しい未来を築くには現在のままで良いのかを考え直す必要があるのではないか。

クラブ訪問

台湾遠征の実力
大阪女子学園　ソフトボール部

去る九月四日、新聞部は大阪女子学園、ソフトボール部を訪ねた。

創設が昭和27年。女子学園ができたのが同25年と言うから、かなり古い訳だ。顧問の先生は我校の安永先生を御存知だという。昔は阿倍野がソフトボールでは圧倒的に強く、それを最初に破ったのが女子学園だそうだこの二つからでも、その古さが分るだろう。

目標は第一にクラブを通じて人間性を鍛える。第二に試合に勝つことだそうだ。

部員数は11名。だが11名中、中学校でソフトボール部に入っていたのはたった三名。というのは三十二年に学校の方針が変わり、選手をとらなくなったからだ。それで巧い者は非常に巧く、下手な者は下手と、実力の差が激しいのが悩みだそうだ。

ちなみにピッチャーの宮城さんは全国でベスト16を選べば、必ずその中に入るという程の実力だという。

部費は年間20万、阿倍野の野球部の十余万に比べると非常に恵まれている様に思えるのだが多い時には月4～5回、公式戦も入れると年に30回もある試合の費用も含めてなので、これらを除くと、その大部分はボール代やバット代に消えるそうだ。

今年の夏は住吉学園と8月4日から8日間、台湾に遠征に行き、六試合、四勝二敗で三位という好成績を上げた。が先にも書いたように全てを含め、部費が年間20万なので、この時にも学校側が餞別としてくれたのが一万円、台湾遠征費用の内16万は向こうの協会が出してくれたが、それでも足りない分はOG等の寄付に頼ったという。

とはいえ、外国に遠征できるのは私立ならでは。公立ではそのようなことは夢の又、夢という所か。うらやましい限りだ。

運動場が阿倍野の第一グラウンド程しかなく、そこに体操部、バレーボール部、その他の運動部といっしょなのだから、とても狭いなどというものではないだが、どのクラブも私達が見学に行くと、大きな声で挨拶をしてくれとても気持ちがよい。自由な雰囲気の中にも一点ひきしまった規律がうかがえ、素晴らしいクラブ、学校であった。

▽△　▽△
▽△　▽△

天理合宿
雨にたたられた合宿

☆今年も七月二十一日から二十五日まで、我が校の運動部のほとんどが天理市合同合宿に参加した。あいにく、天候はくずれてしまい思うような練習ができなかった。また設備や食事は、割合よく、昨年度よりは、いいという意見も多かった。この合宿を通して、やはりクラブ員同志の"和"がより大きく育ってきたように思えた。しかし、この合宿行事については、いろいろと設備や費用などの問題が、これからも尾を引きそうだ。☆

七月二十一日の正午、近鉄天理駅前に進合して、一路、天理大学の体育学部の現地までいそいだ。途中、天理教の総本山らしく、道ゆく人々は天理教と背中に書いた"はんてん"を着ていた。我々は違った雰囲気を持った世界に来たように思った。

そして、やっとの思いで宿舎に着き、午後二時から開校式が行なわれ、こうして合宿生活が始まったのである。

一日目は雨も降らず、割合い良い天気であった。そして三時から五時まで、宿舎から三キロメートルほど離れているグラウンドで、各クラブ活動をしたのである。

ところが二日目以降は、雨が降り、活動も思うように運ばなかった。しかし、そんなことにはめげず、各人一生懸命、全力をふりしぼり、頑張ったのである。

ところで、この天理大学の体育学部の施設だが、宿舎となった修学旅行会館をはじめ、約三キロメートル離れたグラウンド（剣道場・バレー・コート・テニスコート・トラック・ラグビー・サッカーコートがある）そして、大学校舎のバスケットコートと三つに分かれている。付近は、商店街などもありにぎやかではあるが、町の汚物の清掃などは、ゆきとどいており、本当にゴミひとつないといった感じであった。また一方商店街をはずれると静かな地帯が続く、といったのどかな所であった。とにかく全員一応事故もなく、二十五日の午後二時宿舎で解散となり各人帰途に着いたのである。

それでは、各クラブの活動状況を順に紹介していきたいと思う。

サッカー部

全般的に晴天に恵まれず、グラウンドが使用できなかったため、ボールを使う練習より基礎体力面に、重点をおいて合宿を行なった。

今年の合宿は、昨年と比較して食事や冷房などの点は非常によかった。ただ、グラウンドが良くなく、練習方法を考えるのに苦労した。グラウンドの点さえ、もう少しなんとかなれば、言うことはないと思う。また、各クラブごとにミーティングを開いたことも、よかったと思う。

ラグビー部

今年の合宿は、前年度と比べ、雨天続きの上、グラウンドも悪くたんぼの中でやるといった感じだった。そのため、練習が思うようにいかず、合宿らしく思えたのは早朝五時からの往復八キロメートルのロード・ワークぐらいだった。そしてグラウンドまでの距離が二キロメートルぐらいあり、午前九時三十分と午後二時三十分からの練習は往復走り通しだった。そのグラウンドは前に書いたが、すごく悪く、設備がなかった。宿舎は設備・食事・待遇がよく、申し分なかったが、練習着を干す場所がなかったのには困った。今年はバテル者も少なく楽な合宿であったようだ。

女子バスケット部

天理の合同合宿は、女子バスケット部として大変意義があったと思う。一つは、体力向上。練習は言えば、朝昼約一時間半ずつであった。でも内容は、インターバル約三十分等男子とほとんど同じであったので、大変充実していた。もう一つは、合宿が終わってから、クラブとしての和ができたこと。そして昨年と違い、宿舎・食事・体育館が大変良かった。女子バスケット部としては、来年も是非、天理で合宿したいと思います。

男子バレー部

今回の天理合同合宿は、結論を言えば、成功を収めた、と言えるだろう。前回の紀伊田辺合宿に比べ、飯が多くてうまいことと、設備が良かったことが、幸いだった。しかし、現役人数が八人だけというのには、悩まされた。三年生やO・Bの援助はあったが、中心である現役が、わずか八人では、疲労がたまって、風呂に入るのさえ苦痛に感じられた。この風呂も狭かった。それから、大雨が降り、洗濯物が乾かなかったので困ったまあ、次回の合同も今回のようであることを期待する。

女子バレー部

天気の悪い中での合宿だったけれど、去年の田辺の合宿よりは、冷房がはいっていた関係もあったかも知れないが、暑くてたまらないということもなかったように思う。ただ、修学旅行会館と体育館が離れていたので、往復が大変であった。

練習内容としては、去年よりきびしくはなかったけれど、目的であるクラブ内での親睦が高まり、チームーワークがよくなった。

雨天が続いていたが、固有の体育館があったので、コンディションもくずれず、良い結果が得られたと思う。

硬庭部

合宿体験は、今回がはじめてであった。しかし、クラブらしいクラブをしたのは第一日目だけで、その他の日は、コート整備をすれば、雨が降り、全くといってよいほど練習できなかった。練習の面では不満をもったが、夜、コーチと行なったミーティングは、二年生にも一年生にも意義のあるものであった。基本的な素振りの矯正から、試合運び、個人プレーの中でのチーム・ワークのあり方などコーチと共にクラブ員が話し合い充実感のある時を過ごしたところに、合宿の成果があったと思う。

陸上部

今年の合宿は、去年のような暑さは、嘘のように雨の日が続いて暑苦しくはなかった。しかし雨のため、スケジュールは思い通りにはできなかった。今年は、去年の早朝・午前・午後の三部練習から早朝・午後の二部練習に替えてみた。だから一本一本思い切りできたと思う。早朝の五~八キロメートルのJOGは、特に女子はよくがんばったと思う。宿舎は去年より涼しかったが、部屋のわりには人数が多かったので寝苦しかった。また食事もしにくかった。それから、来年は夏の合宿をやめて春に合宿したいと思っている。

剣道部

私達にとって精神的には、確かに有意義な合宿だったと思う。昨年と違って、指導者も得られたし普段の練習では、得られないものがいろいろとあったはずだ。しかし、実際その場に着くまで、設備について詳しいことを教えてもらえなかったのが、残念だ。四方が壁で、まったくの無風状態だったため、あまり激しい練習はできなかった。合宿に行く前に、もう少し詳しく条件などを教えてもらえるとよかったのではないかと思う最後に昨年より涼しかったのが、何よりだった。

木曾御岳
集団生活のむずかしさ

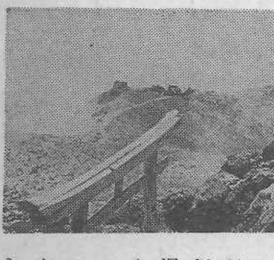
一年生は、「大自然に親しむ、規律ある集団生活を送る、お互いの理解を深め、今後の学校生活に役立てる」という三つの目的を掲げて、七月二十八日から三十一日まで、木曽御岳方面で、合宿行事を行なった。

出発の朝、予定よりやや遅れてバスは学校を後にした。途中、休憩をはさんで約八時間、バスに揺られ、宿舎であるO・A・L御岳高原センターに無事到着した。ここは海抜一三〇〇メートルにある。その夜は、御岳紹介の映画鑑賞と天体観測が予定されていたが、時間の関係で取りやめになった。消燈は九時三十分で、長時間バスに揺られて疲れもあるはずなのにみんな明日からの盛り沢山の行事が楽しみなせいか、なかなか寝つけないようだった。

二十九日からの行動は、二班に別れた。宿舎に残ってさまざまのクラス活動をする組と、御岳登山をする組、三十日は交替である。

クラス活動は、前々から各組ですることをきめていたので、うまくいったようだ。カンケリをする組もあれば、フォークコンテストを開く組もある。場所も、宿舎付近だけでなく、一時間ほど歩いた所にあるスキー場まで足を延ばした組も多かった。スキー場は、私達の他は誰もいない。明るい太陽の下に、ギターの音、元気な歌声、笑い声が響き、とても楽しい時間を過ごした。

組によって種々多様なクラス活動が行なわれたが、特に飯盒炊さんが、おもしろかったという声が多かったようだ。やった時間は、組によって違うが、ものすごい煙に涙を流しながらしたことは、各組共通だ。



御岳登山の日は、午前五時に起き、バスで登山口である田の原まで行った。御岳は信仰の山らしく白装束の人々に多く出会った。そしてそのたびに「ご苦労さん」と言われ、みんなも元気良く、「こんちわ」と呼びかけていた。しかし、二十九日の登山は、反省すべき点が多くあった。この日までに厳重な注意を受けていたのにもかかわらず、一部の人の登山のエチケットが大変悪く、営林署の方から注意を受けるほどだった。又、二人の行方不明者が出た。田の原まで降りて、そのことがわかった時先生方やみんなは、緊張した顔色になった。宿舎に帰ってからこの日残っていたクラスにも、このことが伝わり、時間がたつにつれ、二人を心配する声が高まった。幸い二人は午後六時に発見された。そしてその夜八時から各組に分かれて会議がもたれた。この日登山した組は登山の反省、翌日登山予定の組はどう登山すべきかについて話し合った。ことがことだけにみんな真剣だった。一時は、翌日登山を危ぶむ声もあったが、先生方の話し合いとみんなの声により中止にはならなかった。

三十日の夜、コーラスファイヤが行なわれた。ファイヤ委員の進行で、御岳での最後の夜を楽しく過ごした。バスガイドのおねえさん方のコーラスあり、日頃の威厳（?）をかなぐり捨てた迷調子の歌ありの、なごやかなものだった中でも、一人の先生が歌い終わるとすぐに、「〇〇先生、〇〇先生」とみんな叫び出し、相当多くの先生が前に、引きずり出されたのは予想外だった。そうしているうちに、楽しい時間は過ぎ、「今日の日は、さようなら」を最後に九時に終了した。

三十一日朝食後、宿舎内の一斉清掃を行なった。みんな、四日間お世話になった、宿舎に感謝の気持ちをこめてした。

そして、御岳に別れを告げ、大阪に向けてバスは出発した。

今度の宿泊行事では、いろいろと予想外なことが起こった。集団活動のむずかしさについて、改めてわかった。しかし、それらをその時点だけの問題にしては、いけない。たくさんの楽しい経験、苦い経験を今後の生活に生かそうではないか。

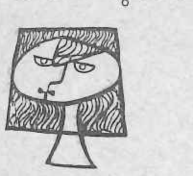
なお御岳高原センターに、記念植樹がされることになった。将来私達の中の誰かが、再びお世話になるかも知れない。その時は、意義深かったこの行事をぜひ思い出してほしいものだ。

◇　◇

みちくさ

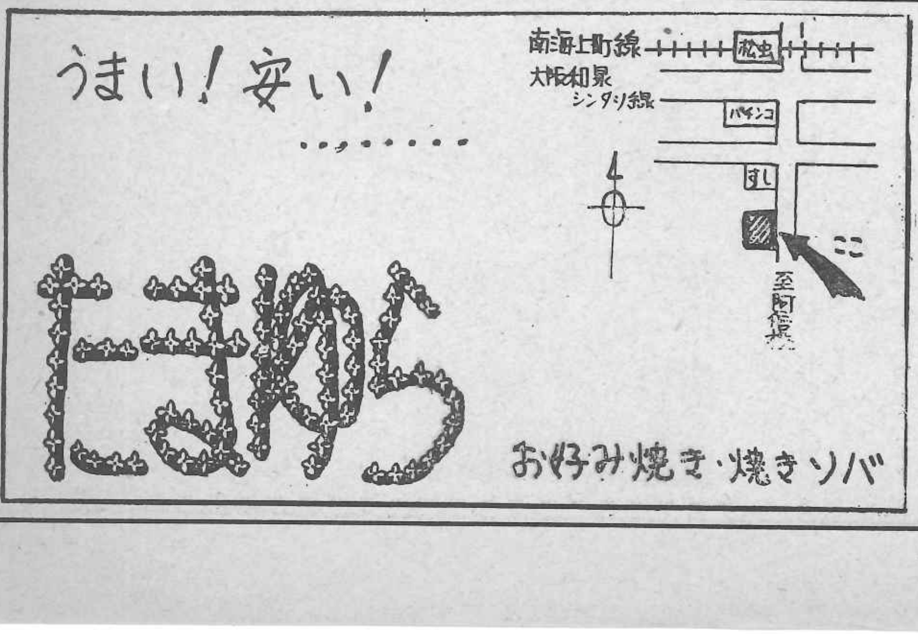
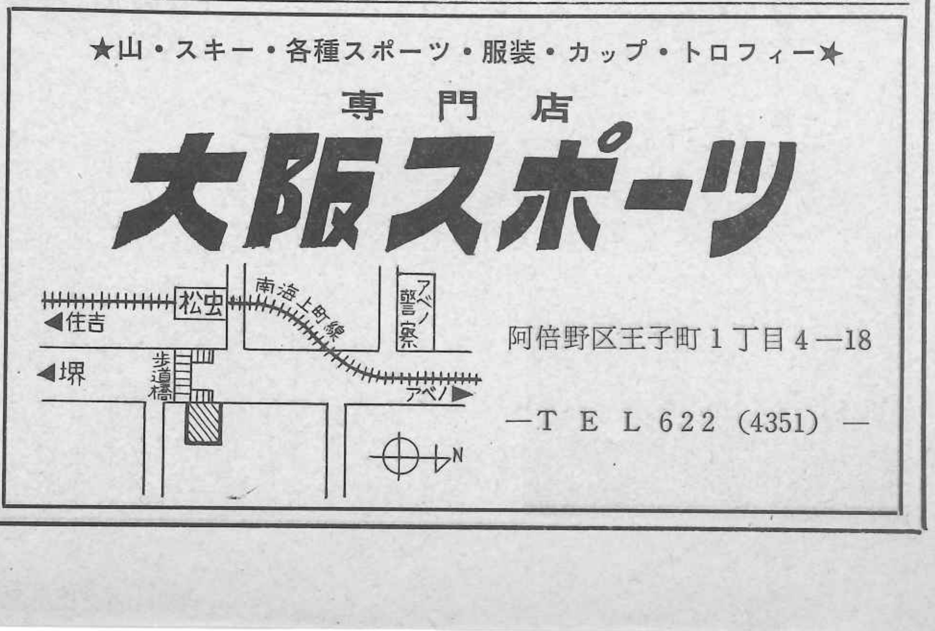
お好み焼―ひぐち

近鉄百貨店の陸橋より、旭屋書店から三分ほどいくと、お好み焼と喫茶の「ひぐち」がある。一階の方は、あまりお勧めできないが二階のお好み焼コーナーは、非常に感じがいいところである。夏は冷房完備、冬はもちろん暖房完備と設備のととのった店である。テーブル数が七つあり、また、たたみに座って食べるところが二つある。値段だが、ほとんど二百円から二百五十円といったところで、友だち同志や、またクラブ内での親睦を図るために行ってみても、良いところであると思う。また、現在は、まだ暑い日が続くので、割合いひっそりとしている。一度行ってみるとよいであろう。



編集後記

体育大会、文化祭と続く、一年で最も忙しいこの時期をようやく乗り越えました。連日六時というつらい毎日を過ごしてきて、今号ができました。今号は、たいへん重要な新聞なので、日頃以上に一生懸命に作りましたが、それでも不手際なところがあるかもしれませんが、全紙面に目を通してほしいというのが部員の願いであります。予算の都合で、タブロイドの六面になって、記事の量も減りましたが、内容の充実をはかろうと努力しました。特集には、"大阪大空襲"を取り上げました。戦争の悲惨さというものがよくわかり少しでも戦争というものを考えて頂ければ幸いと思い、取り上げました。この記事には、金野紀世子さんと森田寿一さんの協力を得ました。ここに感謝の意を表します尚、"ニューギニア戦記"は次号にさせて頂きます。

私達は、一生懸命新聞を作っているのですが、それに対するみなさんの意見がないので困っています。意見があれば、どしどし部室まで来てください。お願いします

現在、一年生部員を募集していますので、新聞に少しでも興味のある方は、部室まで来てください